



THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

弘前大学附属図書館報 No.36 2012.11

目次

巻頭言 アナログへの郷愁	1
特集 第8回『言語力』大賞コンテスト	3
本との出会いを楽しむ<第10回>	7
図書館に関する話題<第10回>	8
Library News	9
図書館グループ紹介	10
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	11

## アナログへの郷愁

学長 佐藤 敬



私は、学生時代に図書館をほとんど利用しませんでした。言い訳すると、当時の医学部分館には自習室がなく、閲覧室も十分でなかったと思います。医学科5年生になって、先輩や同級生との勉強会を始め、そのためにNew England Journal of Medicine 最新号のClinico-pathological Conference欄をコピーしたのが、ほぼ唯一の利用でした。因みに、この勉強会は本当に勉強になり、教員になった後も、いくつかの学生グループと一緒に同じ勉強会を続けましたが、皆が「役にたった」と言ってくれました。

医学部を卒業し、大学院生として研究を始めた昭和50年当時は、インターネットはなく、当初は、単に参考文献を孫引きで探す場所が図書館でした。しかし、自分の研究論文が最初に印刷公表された時、掲載号を図書館で目にした思い出は忘れられません。研究論文が印刷公表される頃には、その内容自体は自分の中で繰り返し反芻し、過去のものになっていますが、実際に論文が掲載された時の喜びは名状し難い独特の経験でした。私にとっ

ての図書館は、至福の思い出の場でもあります。

そのような感激も回を重ねると特別ではなくなりましたが、しばらくの間、図書館は学術誌の最新号で研究情報をチェックする場でした。毎週土曜日に、関連分野の主要な学術誌の、先ずは論文タイトルを読み、興味あるものはじっくり読むことを習慣にしている、至福ではないにしても、十分楽しめる作業でした。

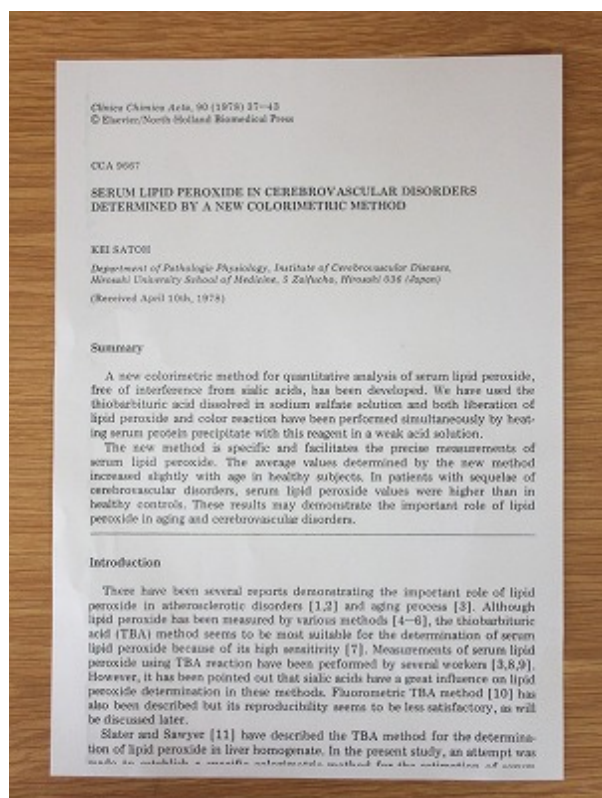
その後はデジタル時代に入り、学術論文もオンラインで読めるようになって、情報としての価値が大いに高まったことは間違いありません。しかし、アナログからデジタルへの変遷を経験した者として、大げさに言えば、以前の図書館への郷愁もあります。

そんな中で、最近、立て続けに外国から2件の別刷り請求があり、いずれも、私が約40数年前に公表した学位論文の別刷りをメールで請求してきたものでした。当時200部用意した別刷りは既になく、最後に残った1冊をスキャンして添付ファイルで返送しました。公表後40年たった論文を

いまだに参考にしてくれる研究者が世界に居ることに喜びを感じるとともに、もう途絶えてしまった別刷り請求の習慣を懐かしく思い出すことになりました。

私が駆け出しの頃は、研究者同士で論文の別刷りを請求するのが一般的で、多くは国外から葉書での請求でした。時には、世界的権威からの請求が届き、大いに感激することもありました。また、送られて来る葉書や切手にはお国柄が現れていて、概して当時の東側諸国からは低品質の葉書で多数の請求が来ました。

1990年代になってから、「この論文の別刷りはありません」という但し書きが付されている論文が出始め、別刷り代や郵送代の節約のためだったのでしょう。そして、徐々にオンラインでの検索が普通になり、少なくとも私の論文の別刷り請求は途絶えました。恐らく今回は、私の学位論文が既にオンラインで見られないほど古いためだと思います。



## 学長が公表した学位論文の1ページ目

Clinica Chimica Acta 90 (1978) 37-43

「Serum lipid peroxide in cerebrovascular disorders determined by a new colorimetric method」

別刷りが請求されることは、研究者としてのささやかな喜びだったと、郷愁のようなものを感じています。時には、私の論文を参考文献として引用した論文の別刷りがお返しに送られて来こともあり、そんな時には、自分の論文にも幾ばくかの価値を感じ、また研究に勤しむ意欲を再確認できるのでした。今でも、論文が引用されることがあれば基本は同じで、時に“Citation Alert”なるメールが送られてきます。したがって、この郷愁はアナログに対するものなのでしょう。当時は、一日に数回、研究室の郵便箱をのぞくのが楽しみで、外国からの葉書があると、少しだけ“研究に勤しむ意欲を再確認”できるのでした。“Citation Alert”を無味乾燥に思うのは、単にアナログ世代の傾向に過ぎないと言えば、その通りなのかもしれません。

いずれにしても、本学からの研究論文が引用される回数は、大学ランキングの重要な指標です。それは、参考文献として引用されることが、研究の世界にそれなりのインパクトを与えることであり、研究者の務めとも言えるからです。私自身は、たまにしか来ない“Citation Alert”を楽しみに、研究者としての引退生活を過ごすことになりました。

私にとっての図書館は、研究生活の中で大きく変わってきましたが、学生諸君にとっては、重要な勉学の間です。今の図書館はデジタル時代にも対応しています。自分のことを棚に上げ、学生諸君には図書館を大いに利用して下さい願っています。

(さとう けい)

# 特集 第8回『言語力』大賞コンテスト

## 第8回弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト 受賞者一覧

I：文学作品部門（ジャンルは自由）		*応募総数19点	
大賞	人文学部2年	齋藤 拓	「老境の鬼」
佳作	人文学部1年	柳谷 志穂	「あいことば」
〃	人文学部4年	清水 卓馬	「食前対話」
〃	人文学部3年	佐藤 里穂	「光芒」
〃	教育学部2年	新屋 祐莉	「ロボットは廃団地で泣かない」
II：評論部門（テーマ「災害復興」）		*応募総数6点	
大賞	人文学部1年	藤田 雄大	「語りがもたらす復興」
優秀賞	人文学部4年	土田 千愛	「仮設住宅から」
佳作	農学生命科学部3年	名取 史晃	「復興と新興」
〃	人文学部4年	川村 啓嘉	「個人の防災意識と復興」

★受賞作品公開★<http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/>

## 大賞受賞者の声

### 「伝える場」としての言語力大賞コンテスト

第8回言語力大賞 大賞受賞 人文学部2年 齋藤 拓



私が言語力大賞に応募しようと思ったきっかけは、過去に大賞を受賞した三浦元義先輩の勧めで、文芸部で志を同じくする同学年の二人と去年そろって応募しました。一人が入選したものの、自分は選に漏れるという結果になり悔しさを覚えたのですが、彼の作品を読むと確かに驚嘆、納得せずにはられませんでした。4,000字という限られた字数の中でどれだけ物語を充実させ、かつ自分なりの色を出すことにおいて自分は他の作品にかなわなかったことを悟りました。すると三浦先輩に、「自分の作品は、郷土色を評価してもらったことにあったと思う」とのアドバイスをいただきました。そこから私は自分が生まれ育った岩手北上への郷土愛を全面的に押し出してみようと思いつき、今回受賞の運びとなった作品を書くに至りました。「原体剣舞連」を下敷きにして、宮沢賢

治へのオマージュとしましたが、やはりいつかは誰かの作品によることのない、自分が考えた胸を張って言える作品を書いてみたいと思っています。そのために、やはり今は数多くの作品に触れ、それらを吸収して自分なりに紡いでみるのが、これからこのコンテストへの応募を考えている人々にも大切だと私は考えます。

続いて、昨年今年とコンテストに応募して思った点を挙げるとするならば、字数の規定を明確に定めることだと思います。授賞式の際に長谷川成一図書館長が「字数制限を出す作品もあった」とコメントし、4,000字程度とは私は疑問でした。小論文のテストなどでは規定の1割前後が一般とされているので、おそらく3,600から4,400字が良いのではないのでしょうか。800字の開きは、短編を競うならば一人一人の腕の冴えがさらに顕著

に見えるものになると思います。

終わりに、コンテストを開催した図書館と審査員の方々、三浦先輩、ひそやかなライバル意識をくれた文芸部の同輩に感謝の意を表すとともに筆

を置かせていただきます。

私のようにコメントを書くべくバックナンバーを読んでいる未来の大賞受賞者の君も、おめでとう。これからも頑張る。

(さいとう たく)

## 受賞にあたって

### 第8回言語力大賞 大賞受賞 人文学部1年 藤田 雄大



この度の受賞を、本当に嬉しく思います。

震災はまだ終わってはいない。この事実を何らかの形で伝えたいと思っていた矢先、本コンテストのことを知りました。「災害復興」というテーマは、自身が携わってきたボランティア活動と、被災地で得られた語りを関連付けて論を展開しやすいのでは、と考えたのが応募のきっかけです。勿論、論を展開するにはかなりの労力を伴うこととなったのですが…

受賞の連絡を受け、改めて自身の文章を読み直してみました。自信を持って言えることは、題材として選んだ語りは偶然得られたものではないということです。何度も現地へ赴き、地道に活動を継続した結果、“必然的に”臨場感に溢れる衝撃的な語り得られたのだと自負しています。しかしながら、文章の表現にはまだまだ稚拙な部分が多く、特に文末の表現については統一感がない印象を受けます。思い返せば、文章が仕上がったのが締め切り当日の午前中で、じっくり時間をかけて推敲することが出来ませんでした。加えて、自身の論を強めるために参考文献を探し、引用する時

間が無かったことも悔やまれます。締め切りに間に合わせるだけではなく、期間を逆算してスケジュールを管理を行うこと。そして、自身の文章を時間をかけて見直し、論の精度を上げる必要性を感じました。

本コンテストについての感想ですが、テーマ部門への応募が少ないことが気になります。先日、弘大生協主催の読書会に参加した際にも、小説を紹介する人は多かったのですが、評論や専門書を紹介する人はごく僅かでした。このことから、最近の大学生は読み物としても書き物としても小説を好む傾向があるのではないかと推測しています。勿論それは悪いことではありません。ただ、実社会に埋め込まれた文脈を読み取り、自身の言葉で明らかにしていく過程も面白く、刺激的だと、私は思うのです。

今世界で何が起きているのか明らかにしたい。この世界を理解したい。抱えた想いを胸に、これからも精進していきます。ありがとうございました。

(ふじた ゆうだい)

# 審査委員から

## 言語力大賞の審査を終えて

第8回言語力大賞審査委員 人文学部准教授 長谷河 亜希子



今年度、初めて審査に加わりましたが、読み終わってしんみりとさせられる作品もあれば、くすっと笑えるような作品、さらには、若さゆえの葛藤が伺われるような作品や、いろいろと考えさせられる作品と、さまざまなタイプの作品があり、楽しく読むことができました。今後の課題は、応募作品数の増加だと思います。作品応募の呼びかけに関しては、教員の方々の更なるご協力を得て、授業やゼミでのビラまきなど、より広く宣伝活動をする必要があるのではないのでしょうか。また、

応募者の皆さんには、より推敲を重ね、無駄を極限までそぎ落とした濃密な作品の応募が増えることを期待します。例えば、テーマ部門の作品、とりわけ論文的な作品であれば、まずは字数制限の倍程度の字数で書き、それを縮めていくといった作業を繰り返していくうちに、言葉に対する感覚が次第に鋭敏になり、文章に磨きがかかると同時に内容も凝縮され、読み手に4000字という短さを感じさせない作品となっていくのではないのでしょうか。

(はせがわ あきこ)

## 弘前大学生の「言語力」

第8回言語力大賞審査委員 教育学部教授 郡 千寿子



弘前大学附属図書館主催の言語力コンテストの審査委員としての経験をふまえて、学生の言語力についての感想を少し率直に記してみたい。以前は評論部門に応募が少なかったが、今回は6本の応募があった。論理的な文章構成能力に自信がない学生が多いと感じていたが、震災の影響もあってか、自分の問題として「災害復興」を真剣に捉え、思考した評論が多かったことは大変喜ばしい。批評や評論に苦手意識をもつ学生が多い現状において、今後も果敢にこうした挑戦を続けてほしいと願っている。

一方の創作については意欲作が多く、応募数も年々増加している。小説といった創作活動につい

ては、能力や意欲を秘めた学生が多いことの現れであるだろう。学生からの要望には「この賞をもっと周知宣伝してほしい」とある。機会があれば、学生たちは自らすすんでその創造性を広げ、言語能力を切磋琢磨しよう、と思っているらしい。学生たちの言語能力は、やはり自分だけではなかなか磨けないものなのかもしれない。

若い彼らならではの発想に満ちた、多くの作品に触れ、審査委員が元気づけられたことは確かであった。そして学生の秘めたる力に触れ希望も感じた。今後ますます活躍してくれる学生が増えることを期待している。

(こおり ちずこ)

# 「言語力」大賞コンテストの審査員を務めて

第8回言語力大賞審査委員 農学生命科学部教授 荒川 修

今回初めて『言語力』大賞コンテストの審査員を務めたが、大変難しく悩み多い任務だった。これから応募する学生のためにも審査視点について述べたい。

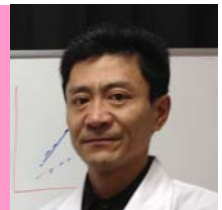
テーマ部門のテーマは「震災復興」だった。やはり経験に基づいた作品に力強さを感じたが、震災復興に対する著者の考えが良くまとめられて、訴える力があるかどうかを評価の基準とし、初めて審査をするにしても比較的審査はやりやすかった。一方、文学作品部門の方は何を基準に審査したら良いのか大変困った。結局その作品が何を主題として書かれていて、何を伝えようとしているのかが強く読者に伝わってくるかどうかを評価基

準として審査を行った。小説はほとんど読まないが、良い小説と言うのは読む人に何か感動やインスピレーションを与えるものではないだろうか。いくつかの作品がありがちな設定やどこかで読んだことがあるような話であったのは残念に思えた。若い人にはもっと独自の発想やスタイルがあっても良いのではないかと思う。選にもれたとしてもそれはその作品が悪いわけではなく、審査員の価値判断に合わないだけかもしれない。今はいろんなメディアで自分の作品を公表出来る時代である。沢山読んで沢山良い作品を創作して欲しい。さらなるチャレンジに期待したい。

(あらかわ おさむ)

## 「ことば」の力

第8回言語力大賞審査委員 農学生命科学部准教授 本多 和茂



書き言葉においても話し言葉においても、「ことば」には私たちが日常思う以上に力があり、時としてその力は人を元気にしたり、勇気づけたりあるいは癒したり、大きな力を発揮するものであると、審査員を担当して再認識したように感じています。

日常生活での会話やメールあるいは講義・ゼミ、会議、論文など、言語を用いる多くの機会があり、その中で「ことば」の力をしっかり活用できているだろうか？一方で、「ことば」の暴力や最近では「ことば」のDVなど耳にすることもあります。いじめの問題でも「ことば」が大きな力を持ち、そ

れがこの場合は負に作用しているのではないのでしょうか？

「ことば」は（良くも悪くも）大きな力を持ったもの。古くから日本には言霊信仰というのがありますね。この「ことば」を大切にし、その力を良い方に向けていくことで様々な問題を解決できる可能性があるのでは？改めてそのことを意識し、日常から取り組むことが出来ればと思います。「言語力大賞コンテスト」が、応募者はもちろん他の弘大生にとっても、「ことば」の力を発揮する、また考えるための良い契機になればと願い、今後も益々充実していくことを望んでいます。

(ほんだ かずしげ)

# 本との出会いを楽しむ 第10回

## 弘前を発信するための2冊

地域社会研究科教授 檜 楨 貢



今の私にとって、自宅の部屋で手の届くところになくはない本があります。その1冊は「津軽ひろさき歴史文化観光検定公式テキスト」(2008年1月)であり、もう1つは「津軽ひろさき・おべさま年表」(2009年9月)です。いずれの本も津軽ひろさき検定実行委員会が編集し弘前観光コンベンション協会の発行したものです。この2つは弘前の「地域検定」試験を受ける人のために編纂されたようですが、検定試験を受けるつもりのない私にとっても弘前を表現するための大事な2冊なのです。その理由は、これらの本は私が日常生活を中心とする弘前を読むための「弘前読本」だからです。別の言い方をすれば、400年以上の年月を積み重ねた弘前というまちに外から来た者が分け入るための水先案内をしてくれる本だということなのです。

私は弘前に住むようになって、7年近くになります。基地のまちの佐世保で子ども時代を過ごし、40歳代の後半まで東京で生活していました。その後、仕事の関係で甲府、宇都宮に住み今では弘前で生活を営んでいます。小さな畑のある市内の一軒家に住み大学に通っています。そんな生活、とりわけコンパクトな城下町の生活が私にはとてもおもしろいのです。2007年8月16日からブログを始めました。1日1記事を書くことを私の生活習慣としています。書き初めて7日目の8月22日の1日だけをなぜだか休載し、それ以外の日々は、弘前に住んで毎日感じたことを愚直に書き続けているのです。この作業はすでに1920日1920記事を超えています。つまり、5年3ヶ月以上、私は毎日ブログを書き続けているのです。これだけ長い期間ですから、弘前を離れた時もありますし、体調を壊すこともありました。それでも何とか1日1記事のブログ生活を続けています。その記事の大半は弘前のことなのです。弘前に拠点を置く生活を軸に書いています。鋭く変化する四季、

われわれを見下ろす岩木山、都市のセントラルパークの弘前城、ぶきっちょな町並み、誇らしげに咲く桜、祭礼の日常性を教えるヨミヤ、都市文化のねふた、秋のもみじ、降雪と雪国の暮らし、津軽の言葉、食べもの、風習、文化。私の耳目から入るもの、体で感じるもの。それらを何でも書いているのです。いい年齢になっていきますので、書き残さないと忘れてしまうという心配もありました。感じたままにブログに書く。私なりのブログ文調をつくり出し、毎回900字前後で書いています。そのための時間としては1日40分程度をかけています。

その際に、弘前を読みとる道具がこの2冊の本なのです。私の体から入り込む弘前のことを加工し発信する際の事典・辞書としての役目を担わしているのです。繰り返されている弘前の春、夏、秋、冬のこと。弘前の歴史と文化のこと。先人の偉業のこと。たくさんの図表と写真を使った弘前の原風景。この2冊の本はこれでもか、これでもかと弘前のことを表現しています。私が弘前のまちで感じていることなんて、表面的でしかないのだと言いたげです。弘前のまちは奥深い。だから、この2冊は弘前で生活している限り、手の届くところになければならないのです。



(左：津軽ひろさきおべさま年表)

(右：津軽ひろさき検定)

私は弘前に生活してその体験をブログで発信するつもりでした。それを5年以上も続けているうちに、生活体験と発信の関係が逆転してしまいました。最初の頃は生活体験を発信することでした。ところが、それが毎日の発信ということになると、そのために、弘前で生活体験を求めるようになってしまっています。ブログを書くために、弘

前のまちを歩くということが多くなっているのです。だから、この2冊の本が必要になりました。私の生活の一部に組み込んでいます。学ぶ本、楽しむ本もあれば、この2冊の本のように私の生活体験の発信をサポートしている本もあります。私のブログ発信の生活習慣はこれからも続けます。その座右の銘こそこの2冊なのです。

(ひまき みつぐ)

檜楨先生が紹介された、「津軽ひろさきおべさま年表、津軽ひろさき検定」は本館で所蔵しています。

所 在: 本館2階開架書架 他

請求記号: 212.2/Ts36

## 図書館に関する話題 第10回

### 国際社会関係に関する図書について

人文学部教授 カーペンター ヴィクター リー

「先生、図書館の国際関係論の棚が空っぽです。スカスカになった棚に、何冊かの本が立たずに寝てしまっています…。利用できる本がまったくありません。今、見に行ってください。」

ゼミ生から、そう言われて、図書館本館 2F、国際政治学などが開架配置されている本棚の前に立った。目の前の棚には、2、3冊の本が転がっているだけだった。

特に期末試験前の時期になると、この傾向はますますひどくなり、受講生から口々に「図書がすべて借り出されていて、参考文献として読もうと思ったときに借りることができない」という声が聞かれた。試験問題が事前に示されると、それに関連する図書が、その講義の後すぐに棚からすべて姿を消す…。「都市伝説」のような話だが、脚色なしの事実であった。ある受講生からは、「国際関係論図書館資料充実についてのお願い」が担当教員に対して文書で出されたほどだった。これは今から8年前、2004年のことである。

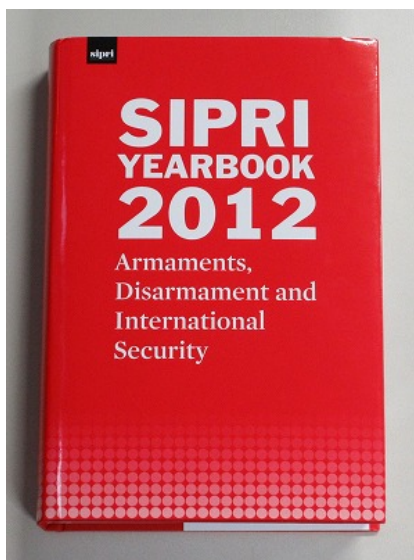
2001年から、本学でも、私と新任の同僚教員によって、国際政治学・国際協力論・国際平和論な

どの国際関係系科目が充実して開講されるようになった。開講前の下調べで、弘前大学附属図書館本館では、国際政治・国際関係論分野を研究する上で必須の基礎的文献・理論書が十分には所蔵されていないことが判明した。かつ、時事的な国際問題を扱う最新の専門書も満足に網羅されているとは言い難い状況であった。インターネット環境が今ほど整備されていない当時、受講者数が多い、21世紀教育科目「政治学の基礎」、人文学部専門科目「国際政治A・B」「国際協力論A・B・C」の国際関係論科目の関係図書はヘビーローテーションを余儀なくされた。

そのような声が出る前から、われわれ担当教員も、機会を見つけては研究費を使って図書館に国際関係論専門書を開架配置してきた。また、人文学部学部長の理解を得て、裁量経費の中から毎年、少しずつ、テーマを厳密に検討し作成したリストに基づき必須文献を揃える努力を続けてきた。それでも、まだ、はじめの学生の声のように、十分とは言い難い。



この度、弘前大学附属図書館文系図書整備5か年計画の最終年にあたり、学生の要望・利用頻度の高い国際関係分野の図書を補充したいとの有難い要請を頂戴した。そこで、学生たちの関心の高い分野を中心に選定をした。「戦争」「平和」「安全保障」「貧困」「開発」「地域主義・地域研究」「グローバル化」といった普遍性の高いトピックのみならず、東日本大震災以降、次々と出版されている震災復興やボランティア、原発・放射能問題に関する図書、アジア・アメリカ・欧州・中東政治など特定の地域を対象とした研究書を揃えることができた。ゼミ生らもこのプロジェクトに関わってくれ、学生側からの要望もリストに反映することができた。彼らはそのプロセスで「公費を扱うことの難しさ」も学んでくれたと思う。



「SIPRI Year Book 2012 年版」

今回の配架図書の中で出色は、スウェーデン・ストックホルム国際平和研究所発行の『SIPRI Year Book』である。この年鑑は、軍備や軍縮に関する世界的統計や報告を発表するもので、CiNii（NII 論文情報ナビゲータ）で検索するとわかるように、多くの大学図書館で継続配架されている。公費支出の原則として、高価な原語の専門書や、新書のような安価で本来自費で買うべき本は、今回のリストからできる限り排除した。しかし、国際政治・国際関係論を研究する上で重要な資料となるこの年鑑だけは、別格扱いをさせてもらった。このシリーズが並んでいることで、図書館書架の品格が上がることは間違いない。しかし、本は「使われてなんぼ」であろう。英語を嫌わず、是非、活用して欲しい。

何より、胸を張りたいのは、今回の整備事業で、国際政治・国際関係論系図書を納める書架の景色が一変したことである。一度、書架の前に立ち、この美しい景色を眺めて欲しい。Amazon でどんな国際関係論系書籍も手に入る今だからこそ、身体性をもって、「知の森」に遊んで欲しい。目的の本の隣に、思いもかけない素晴らしい本が待っているかもしれないのだから。

（カーペンター ヴィクター リー）

国際社会関係図書については、今年度中に約550冊購入し、本館2階開架図書の所定場所に配架します。

## Library News

### 「阿仁鉱山関係絵図」デジタル版公開

附属図書館では、10月2日より、貴重資料に指定されている「阿仁鉱山関係絵図」のデジタル版（5枚）を附属図書館のホームページ内で公開しました。昨年の「津軽領元禄国絵図写」に続き2件目の公開となります。

阿仁鉱山関係絵図は、昭和40年、旧文理学部改組の際に、交付された機関研究の経費によって購入され、購入されたものです。なお、当該資料については、図書館報「豊泉」第34号5頁に詳細な説明があります。

## 知の宝！古本市～リユース・ブックフェア～を開催

附属図書館では、弘前大学総合文化祭期間中（10月27日～28日）に、「知の宝！古本市～リユース・ブックフェア」を附属図書館1階職員玄関前で開催しました。

この古本市は、図書館で不用となった図書を無料で差し上げ、再利用（リユース）していただく企画であり、平成19年から弘前大学総合文化祭期間中に実施しているものです。

会場には、多くの学生や職員、一般市民が来場し、興味のある分野の資料を次々と持ち帰っていました。今年は例年より一日少ない二日間の開催



となりましたが、約2,000冊の資料を新しい利用者に利用していただくことになり、大盛況の内に終了しました。

## 図書館のグループ紹介

### 企画管理グループ

図書館のグループ紹介第4回目は、企画管理グループについて紹介させていただきます。

企画管理グループは、文京町キャンパスにある附属図書館本館一階の事務室で、企画管理担当2名、出版会担当3名、資料館担当1名で業務を行っております。それでは、企画管理担当・出版会担当・資料館担当それぞれの主な業務についてご紹介します。

企画管理担当の主な業務は、附属図書館の予算や経理に関すること、会議や行事に関するところで、いわば「附属図書館の縁の下の力持ち」といったところでしょうか。学生のみなさんが身近に感じるイベントとしましては、弘前大学学生『言語力』大賞コンテストがあります。毎年10月27日の「文字・活字文化の日」に発表をあわせて作品を募集しています。大賞作品には、豪華10万円の図書カードが贈られます！学生のみなさん、ぜひ来年の『言語力』大賞コンテストへの参加をお待ちしています。

続いては出版会です。学生のみなさんが授業で使っているテキストや参考書の中に、「弘前大学出版会」と書かれたものはありませんか？

出版会担当は、持ち込まれた企画の検討、原稿

のチェック、編集作業、出版された本の宣伝、在庫管理など、「本の制作・販売」に関わる業務を行っています。

出版会は平成16年に設立され、平成24年10月末時点で123冊の書籍を出版しています。これらはすべて図書館にありますし、弘大生協で購入することもできます（一部非売品もありますが）。この中には教員はもちろん、教員指導のもと学生が執筆した書籍もあり、また学生が表紙デザインをしている書籍も数多くあります。

・・・もしかしたら、みなさんの研究成果も書籍として出版されるかもしれません！？

最後に資料館を紹介します。今年10月にオープンしたばかりの資料館は、「弘前大学 過去から未来へ」をテーマに前身各校の歴史をはじめ新制大学となってからの約60年間のあゆみ、各学部・研究科毎にコーナーを設けての歴史や研究成果の紹介、海外の大学との交流の歴史、世界的な業績を挙げられた方の紹介や歴代の弘前大学ねぶた絵を写真と3D映像で紹介するコーナーなどを設けています。入館料は無料ですので、みなさんの来館をお待ちしています。


（企画管理グループ係長 宮川 順子）

# 本学関係者の著作で、図書館に寄贈された図書と資料の一覧

平成24年4月～平成24年9月分受贈分

学部名	寄贈者名	書名	発行所	部数	所蔵先
弘前大学	教育委員会	ティーチング・ポートフォリオを活用したFD活動の展開	弘前大学出版会	1	本館
	「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」事務局	「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」平成23年度事業報告書	弘前大学「被ばく医療プロフェッショナル育成計画」事務局	1	本館
人文学部	社会学研究室	マチの過疎 北東北の過疎：過疎・限界集落問題研究 2010年度調査報告	弘前大学人文学部社会学研究室	1	本館
	亀ヶ岡文化研究センター	下北半島における亀ヶ岡文化の研究：青森県むつ市不備無遺跡発掘調査報告書 (弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告;8;第1～3分冊)	弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター	3	本館
	田中一隆, 今井正浩	Archaeology of Intellectual Aspects of European Culture : A Volume of Articles Based on the Project of International Collaborative Research	Faculty of Humanities, University of Hirosaki	2	本館
	中村武司	空間のイギリス史	山川出版社	1	本館
		はじめて学ぶイギリスの歴史と文化	ミネルヴァ書房	1	本館
	曾我亨	シベリアとアフリカの遊牧民：極北と砂漠で家畜とともに暮らす	東北大学出版会	1	本館
	関根達人	北海道渡島半島における戦国城館跡の研究：北斗市矢不來館跡の発掘調査報告	弘前大学人文学部文化財論研究室	1	本館
作道信介	糞肛門：ケニア・トゥルカナの社会変動と病気	恒星社厚生閣	1	本館	
教育学部	深作拓郎	地域で遊ぶ、地域で育つ子どもたち：遊びから「子育て支援」を考える	学文社	1	本館
保健学研究科	保健学研究科	弘前大学大学院保健学研究科緊急被ばく医療人材育成プロジェクト：活動成果報告書	弘前大学大学院保健学研究科	1	分館
理工学研究科	水田智史	アルゴリズムとデータ構造	共立出版	1	本館
	清水俊夫	Vertebrate phototransduction and the visual cycle	Academic Press	1	分館
国際交流センター	諏訪淳一郎	パフォーマンスの音楽人類学	勁草書房	1	本館

弘前大学 医学部 鵬桜会	鵬桜会	北辰をめざして：「北国から、さわやかな風を」余話	岡本印刷	1	分館
		余話妊娠カウンセリング	青春出版社	2	分館
		ブドウ糖初期分布容量の基礎と臨床 周術期体液管理への応用	真興交易(株)医書出版部	3	分館
		Fluid volume monitoring with glucose dilution	Springer	2	分館
弘前大学 名誉教授	松木 明知	DDT：the insecticide dichlorodiphenyltrichloroethane and its significance	Birkhäuser	1	分館
弘前大学出版会		写真集弘前界限：1989-1991 (続々)	弘前大学出版会		本館 2, 分館 1
		写真集弘前大学の四季 = four seasons Hirosaki University	弘前大学出版会	3	本館 2, 分館 1
		里の自然学：津軽の人と自然と (弘大ブックレット;No.9)	弘前大学出版会	2	本館 2
		知能機械工学実験・実習テキスト A	弘前大学出版会	3	本館 2, 分館 1
		知能機械工学実験・実習テキスト B	弘前大学出版会	3	本館 2, 分館 1
		子の監護権紛争解決の法的課題：弁 護士実務の視角から問う	弘前大学出版会	3	本館 2, 分館 1
		白神学入門	弘前大学出版会	3	本館 2, 分館 1
		ティーチング・ポートフォリオを活用 した FD 活動の展開	弘前大学出版会	2	本館 1, 分館 1
		科学におけるルネサンス	弘前大学出版会	3	本館 2, 分館 1
		生きることに責任はあるのか	弘前大学出版会	1	分館
弘前大学附 属図書館	太宰治自筆 ノート研究プ ロジェクト	太宰治自筆ノート研究プロジェクト成 果報告集 (平成 23 年度)	太宰治自筆ノート研究プ ロジェクト	2	本館
卒業生	秦 温信	北辰をめざして：「北国から、さわやかな風を」余話	岡本印刷	1	本館
弘前大学生協同組合		弘前大学卒業記念アルバム	弘前大学生協同組合	1	本館

	弘前大学附属図書館報「豊泉」第36号		発行日：平成24年11月30日
	編集／弘前大学附属図書館広報委員会		
	発行／弘前大学附属図書館 〒036-8560 青森県弘前市文京町1		
	TEL 0172(39)3162 FAX 0172(39)3171 URL <a href="http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/">http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/</a>		

標題の「豊泉」は、明治9年の「仏国学制」付録上巻中の「人智ヲ広ムルノ豊泉アリ」の文に基づき、松原邦明名誉教授命名 題字：藤原楚水編「書道六體大字典」(三省堂)より